

眞のステーツマン

鈴木 永二

武道館におけるあの厳肅な葬儀のあと、たまたま機会を得て瀬田の小平邸におうかがいした時、居間でお目にかかった小平さんの遺影が今も脳裡に焼きついて離れない。志げ子令夫人から、東京サミットの際の写真とお聞きした。亡くなられる数時間前、伊東官房長官からの電話で、小平総理のご病状が快方に向っておられるとお聞きしてほっとしていた直後だけに、テレビで急逝のニュースを聞いた時は全く愕然とした。

小平さんは東京商大で私の一年先輩であるが、中世キリスト教神学の鼻祖トーマス・アキィナス研究の碩学、上田辰之助先生のゼミナリストンであった。先生の下で、社会思想史や政治倫理の基本を学び、さらにキリスト教的な哲学思考を深く身につけられた。卒業後も一貫して教養を深め、哲学する心を持ち続け、物事の本質をトントン突き詰めて思索してこられた。こつした努力の積み重ねが、人間として、また政治家として大成させた所以と思われる。

小平さんには「ひとから冗談を今日いわれて明日になって笑う」という逸話があるほど相手のどのような発言も真摯に受け止める人だった。考えに考え抜いた後、ひとたびこつと決意した時は断乎として貫く、ある意味では愚直なまでの真正直さが大平哲学の真髄だと思う。宰相として、選挙に不利を承知で、行き詰まった国の財政再建のために一般消費税の導入、所得税非課税限度の引下げや道路財源の使途見直しなど、繰り返し選挙前に力説されたことはその好例といえよう。「ポリティシャンは次の選挙を考え、ステーツマンは次の世代を考える」

とは英国の賢人クラークの有名な言葉であるが、田園都市構想や総合安全保障など、つねに国の将来を予見しておられた大平さんこそ真のステーツマンと呼ぶに相応しい。

かつて化学会社への就職を希望されたこともある大平さんは、五十三年頃不況のどん底にあった化学業界に対して非常な関心を寄せられ、時折お目にかかった時なども、化学工業の近況、特にナフサ等の原料事情など詳細に尋ねられたことが記憶に新しい。私が日本化学工業協会の会長であった昭和五十五年の年頭、業界の各団体を糾合して初めての化学業界合同賀詞交換会を開催し、大平総理のご挨拶をお願いしたところ、即座に快諾され定刻の二十分前から会場にお見えになり、転換期に直面しているわれわれ化学産業に携わる人々に温かい激励のお言葉を頂戴し、親しく懇談の場を持っていただいた。これが契機ともなつて、一九八〇年代の化学工業の進むべき方向として、化学や石炭液化、バイオテクノロジーなど創造的な技術革新に向け、政府の援助の下、業界結束して取り組む協調と連帯の気運が醸成されたのである。豪州における石炭液化プロジェクトなども、ご訪豪前にお話する機会があつたが、よく勉強しておられるのに敬服した次第である。

同窓会などいろいろの席でよく一緒する機会に恵まれたが、大平さんが自ら話題を提供して座持ちするのを見たことがない。いつも皆の話によく耳を傾けうなずく姿が目につかぶ。しかし、公の場で自己の信念を吐露される時の理路整然、炎の如き雄弁は、全く別人の如き観があつた。

内外ともに疾風怒濤の時代に、不転の信念をもって国事遂行に敢然と身を挺しておられるさなか、不幸斃れられたことはさぞご無念であつたことと拝察する。しかし、ご逝去を機に挙党体制が確立され、続く選挙に圧勝して安定多数を勝ち得たことは、大平さんのご遺志が国民を動かした結果であり、その意味では、男子の本懐と莞爾としておられるかも知れぬ。